

事例報告

遠隔共同講義システムの活用事例

文学部准教授 阿部 善彦

2019年度全学共通科目総合系科目「生・身体・テクノロジー・神」で遠隔共同講義を行った。その経験をもとに運用方法や課題について所感をつらつらと述べてみたい。

念のため言葉の説明から入ると、遠隔共同講義というのは、新座キャンパスと池袋キャンパスを同時中継で授業を行うことである。このたび、どうしてそのようなことをやることになったのか。これまで学内委員会で新座と池袋で同時中継の会議に出席することがあり、授業も同時中継でやったらどうだろうと思い、今回試みたのである。

毎年配られる「教務に関するご案内」には親切に池袋と新座で遠隔共同講義が可能な教室というのが明記されている。それをあてにしながらか前年度に計画を立てた。まず気を付けなければならないのは、池袋と新座両方に教員がいなければならない、という条件である。これは専任でも兼任でもよい。だがもちろんゲストスピーカー、TA だけではダメであり、各教室に1名教員を配置する必要がある。ざっとこのような説明を事務から受けた。

今回遠隔共同講義を行ったのは全学共通科目の企画提案型科目（コラボレーション科目）であり、もともと複数教員が同時に授業に参加する予定であった。そのため、私が池袋に毎回出講し、新座は兼任講師が毎回出講することにした。（科目としては、シラバス、担当者は同一だが、池袋と新座で科目コードが異なり、どちらかに学生は登録する。）

同時中継で行うにあたって、会議と授業では勝手が違うところがあった。私が出たことのある会議では双方の様子を、カメラを通じて送り、音声も双方のマイクをオンにしておいただけだった。しかし授業では、1登壇者、2授業資料（パワポ、OHPなど）3受講者の三要素の組み合わせを考える必要がある。例えば、メインの登壇者が池袋にいる場合、池袋の教室のスクリーンは、1枚が授業資料（池袋発）、もう1枚が新座の受講生（新座発）、ということになる。新座の教室のスクリーンは、1枚が授業資料（池袋発）、もう1枚が登壇者（池袋発）ということになる。

授業全ての回がこのような形式であるならば、最初にメディアセンターの方に設定してもらえばよい（いつもお世話になりました）。しかし例えば、最初は池袋、後半は新座の登壇者が交互に講義するとどうだろうか。最初は、池袋、新座とも上記の通りである。しかし、後半は、池袋のスクリーンは、1枚が授業資料（新座発）、もう1枚が新座の登壇者（新座発）に切り替えとなり、新座のスクリーンは1枚が授業資料・パワポ（新座発）、もう1枚が池袋の登壇者（池袋発）に切り替えとなる。しかし、この切り替えがちょっと難しかった。「このスクリーンに今度は新座の登壇者を映したい」と思っても、

教卓のパネルの操作はタッチ一つではすまない。授業を中断してメディアセンターに来てもらい、操作をお願いした。その後、池袋ではTAの方が操作を覚えて、スイッチャーを担ってくださった（新座は登壇者自身による）。また全力事務室も切り替えについてメディアセンターとやりとりしてくださったのでその後は問題なく進んだ（そのほかもろもろサポートしてくださったので助かりました）。今回の授業ではこのように授業を進める中で問題が発生したものの関係者の皆さまの献身的サポートによりことなきを得たが、今回のケース以外にも想定しておく必要があるだろう。例えば、双方の登壇者が相互の授業資料をもとに質疑をする場合は、双方のスクリーンに池袋発と新座発の授業資料をそれぞれ映し登壇者は音声のみでやりとりすることになるのだろう。

当然だが、出講いただく先生は授業テーマを優先してアレンジした。今回はたまたま新座にも出講可能でしかも同時中継にご協力いただける先生が揃ったが、池袋と新座で出講スケジュールを揃えるのは一手間かかる。仮に先に挙げたような機材操作が頻繁にあるような場合でなくとも、遠隔共同講義では登壇者は通常の授業の進行にプラスアルファの操作や注意が求められるがTAを余計につけてもらうことはできなかったため新座の登壇者には機材準備、授業進行、機材操作、新座教室の学生対応（出席確認）、など一人でやっていただく必要があった。そこも含めて快諾してくださる先生が揃ったのは幸運でありがたかった（しかも、結果的に急病や事故で来られないこともなかった。そうした事態は想定していなかった。万が一の時はどうすれば・・・？といまさらながら思う）。いずれにせよ、実感としては、なかなか大変だった。各教室へのTAの配置や兼任の増員を認めるなど、安定的な運営に不可欠な人的サポート体制が整えば、継続的な実施もあり得るだろう。

あべ よしひこ